
聖夜に君と

金城 ユウ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

聖夜に君と

【Nコード】

N2333C

【作者名】

金城 ヌウ

【あらすじ】

聖夜に夜に出会った少年と少女、少女は少年のもとに青い石のペンダントと再会約束を残して・・・そして、九年後。あの日のように空から降ってきた少女は・・・

始まりの夜の君と僕

「うわー、きれいだなあ」

十歳ぐらいの少年が、毛布に包まり窓の外を見ている。窓の外では、まるで粉砂糖をまぶすように、街が雪化粧を施されていく。

その様子は、幻想的でこの夜にふさわしいものだった。そう、クリスマス夜の夜に。

「きゃー。どいてどいて」

ドン！少年の上に、悲鳴と共に誰かが降って来た。ここがマンション最上階の十五階で、部屋の中だというのは、この際置いておく。

少年の上には、サンタのような赤い服に帽子をかぶった同じぐらいの女の子が乗っかっている。何をどう否定しようが、それが事実だ。「痛た・・・もう、どんくさいわね」

少女は、少年の上から降りながら言った。青い髪にアイスブルーの瞳、まるでお人形さんのような少女だ。

「ほら、大丈夫。怪我はない？」

少年に手を差し出す。少年は少女の手を取りながら言った。

「君は誰？」

「人に名前を聞くときには、自分から名乗るものよ」

少女は、大人びた口調で言い。少年の手を引き、立たせた。

「柎^{ひいらぎせい} 聖」

「ホーリイ、ホーリイ」スノーよ」

少女は、極上の笑顔を浮かべた。

聖夜に君と

柎 聖は、寒さで目を覚ました。但し、マンションの一室ではなく、六畳一間のポロアパートでだが……………

「懐かしい夢を見たな……………」

その後、ホーリイと一緒に、毛布に包まり、雪を眺めながら、いろ

いる喋ったはずだ。内容はよく覚えていない。明け方、彼女を迎えにきたのは、トナカイだった、人の言葉を喋る……」
翌朝、両親にその出来事を話したが、「夢でも見たのだろう」と、笑って信じてくれなかった。友人達もそうだ。聖自身、夢だと思っただかもしれない。少女が、ホーリイが残した青い宝石のペンダントがなければ……

「聖が持つていてよ。約束。今度、会ったときに返すのよ。無くしたら怒るからね」

首から下げたペンダントを握る。このペンダントだけが、あの夜の出来事が事実だったことの証拠だった。

「お疲れ様でした」

聖は、アルバイト先から外に出た。どこからか、クリスマスソングが聞こえてきた。

「今年も、一人か……」

クリスマスに異性と、一緒に過ごしたのは、九年前の出来事だけだ。両親と死別して高校大学と学費稼ぎのアルバイト三昧で、恋人を作る時間も余裕もなかった。

「ふう」

聖はため息をついた。

「家に帰って寝よ」

明日も、朝からアルバイトだ。聖は、クリスマスの陽気な雰囲気のある街を、いつも通りに家路についた。

聖がアパートのドアを開けた瞬間、女の子の声が響きわたった。

「どいてどいて」

周囲を見回す。誰もいない……瞬間、上から何かが落ちてきた。グシャッ

聖は、ものの見事に潰れた。

「痛たたたた」

聖の顔の上に、赤いブーツがのつていた。それをどかし、起き上がろうとして、それが目に入った。レースの装飾のついた白い下着とそこから伸びる白い脚・・・

「しししし、白」

聖が素つ頓狂な声を上げた。その声に気がついたのか、その女の子は、聖の上から飛び退いた。

「イヤ、スケベ！変態！ストーカー！」

女の子の余りといえは余りなセリフに聖がキレかかる。

「ちよつと待て！俺が押し倒した訳じゃない！そつちが、上から降ってきたんだろつ。つて、上から・・・」

デジャビュ。前にも似たことがあったような？

聖は、改めて女の子を見た。ミニスカートになっているサンタの衣装を着ている。ショートの青い髪に、アイスブルーの瞳。そして、人形のような愛らしさ。面影があった。

「ホーリイ？ホーリイ！スノー？」

女の子も目を見開いていた。

「...せ、聖なの？」

無言で見つめあう二人。先に動いたのはホーリイだった。

「聖、聖、聖、会いたかつた！」

ホーリイが、聖の頭を抱えるようにして、抱きしめる。

い、息が出来ない。でも柔らかなふくらみが顔に当たつて、気持ちいい...聖は、息の続く限り、ホーリイの好きにさせることにした。

「それじゃ、聖は一人なんだ。そつか、そつか」

ホーリイがなんだか嬉しそうに言う。

「そつだよ。俺には、恋人の一人もいませんよ」

「じゃあさ、時間あるよね？手伝つて」

突然のことに、聖は聞き返した。

「何を？」

「いいから、いいから、これを着て」

白い袋からホーリイが取り出したのは、サンタの衣装だ。仕方無しにそれを身に付けた。

「うん。似合っているよ。あと、ブーツと帽子もね。これを着ると壁抜けが出来るようになるから」

「壁抜け？」

「そう、プレゼント配るのに必要でしょ。家人には見つからないでね。大騒ぎになるから」

「ホーリイ、君は一体？」

胸を張ってホーリイは言った。

「私の仕事は、サンタクロース。世界中の子供達に夢を配るのが仕事よ」

そんなこんなで、俺は、サンタクロースをしている。何度か家人に見つかりかけたが、結果オーライ。無事配り終えた時には、もう明け方近くになっていた。

「今年も、無事終わったー。ありがとね聖」

「いや、しかし、結構楽しいな。逆泥棒みたいで」

ホーリイがクスリと笑った。

「確かに、見つからないように、忍び込むまでは似ているわね」

ホーリイが笑顔を、聖に向けた。

「聖、そこに座って目を閉じて」

「何？」

「いいから、私の言うことを聞いて」

聖は、ホーリイの言う通りにした。聖の唇に暖かく柔らかい感触が…びっくりして目を開いた聖の目の前に、ホーリイのアイスブルーの瞳があった。

「ホ、ホーリイ」

声が、うわずる。

「誰にでもするなんて思わないでね。聖だからだよ。さ、もう行かなきゃ」

「えっ」

「もう時間なの。夜が明ける前に発たなきゃ」

僕は九年前の約束を思い出した。

「ホーリイ。これ」

青い宝石のついたペンダントを、ホーリイにかけてやる。

「これ、覚えていてくれたんだ」

「忘れたことなんて無いさ。君のこと」

ホーリイの瞳に涙がにじんだ。

「ごめんなさい。もう行かなきゃ。はい、聖にもプレゼントあげる」

ホーリイは一枚のカードを、聖に握らせた。

「また、会いましょうね。約束よ」

ホーリイは手を振ると、空飛ぶソリで行ってしまった。

聖は、ホーリイが消えた方角をしばらく眺めていたが、手の中のカードに視線を落とした。そのカードを読んだ聖は、いきなり笑い出した。

世界が、いきなり狭くなったみたいだ。そのカードには、ホーリイの住所と電話番号にEメールアドレスが書かれていた。

始まりの夜の君と僕（後書き）

魔法のiらんどで、2003年のクリスマスから2004年のクリスマス間に、全5回で連載した『聖夜に君と』シリーズの第1話です。

聖夜に君と

比翼連理の君と僕

ある日、フェリア・ロツソ（二十二歳）は、お隣のホーリィ・スノーの家の前を通りかかった。青い髪、アイスブルーの瞳をした妹のような少女だ。去年、祖父を亡くし一人暮らしをしている。

甘い香り。「チョコレートかしら？」

気になったフェリアは、ホーリィを訪ねる事にした。

「ホーリィ、入るわよ」

ノックして、ドアを開けた。チョコレートの甘い香りの中に何か焦げた臭いが混じっている。

「ふえ〜えん、また失敗した」

「ホーリィ、一体何をしているの？」

「フェリアさん。ちよつとうまくいなくて・・・」

鍋の中には、焦げたチョコレート・・・今日は二月十三日・・・

「バレンタインのチョコ？」

ホーリィの手を見ると絆創膏が巻かれていた。「努力の跡よね」と口には出さずに部屋を見回すと、アントロピーが増大している。

そして、うまくいかない理由は、どうやらチョコレートの入った鍋を直接火にかけたらしい。

「ホーリィ・・・あなた、湯せんって知ってる？」

「へっ？」

フェリアは額を押さえた。

「わかったわ、教えてあげる。けど、びびびしいくからね」

と君に夜聖

終 こぼれおひ 聖は大学の片隅で、趣味の絵を描いていた。別に風景画ではないので、家に帰ってからゆっくりと描けばいいのだが、2月とは思えないほどのぽかぽか陽気だった為、外で描く事にしたのだ。今日はバイトもないし、たまにはこんなのもいいなあと思いつながら、

親しい女の子からもらった義理チョコをかじる。

義理が四個か。ホーリイはどんなのくれるかな？などと考える。昼前にメールが届いたので、そろそろ来るはずだ。まさか、いつものように空降ってくるなんてことはないだろう。こんなところで、他人に見られたらえらい騒ぎになる。

「柊くん。何をしているの？」

振り返るとそこには、青い髪の彼の待ち人ではなく。腰まである黒髪の美女が立っていた。

「高原先輩。趣味の絵を描いているんですよ」

高原 彩^{たかはしあや}。ひとつづえの先輩。入学したてのころに、図書館で本を探してもらって以来。よく声を掛けてくれる。

高原は、スケッチブックを覗き込んだ。

「モチーフは『兄弟紗』の一文？比翼と申す鳥は、身ひとつにて、頭はふたつあり、二つの口に入る物、ひとつ身を養ふ。綺麗な絵ね」
聖は、照れ隠しに頭をかいた。

「ありがとうございます。先輩は何をしていたのですか？」

高原はニコリと微笑んだ。

「お言葉ね。柊君を探していたのよ。はいこれ」

高原は聖に綺麗に包装された箱を渡す。

「チョコレートですか？ありがとうございます」

聖は、ありがたく受け取る。

「ね、開けてみて」

高原にそう言われ、箱を開けた。

「手作りですか？これ」

「そうよ。ついでに言っと、君が本命なんだけどな。柊君、私が好きだって知らなかったでしょ」

突然そういわれて、頭の中が真っ白になった。

高原先輩が…美人で誰にでもやさしくて密かにファンクラブもあって、まさに八面玲瓏としか言えない女性が、自分に好意をもって

る！？

2ヶ月前なら戸惑いつつも舞い上がり、二つ返事で承諾していただろう……

「高原先輩。ごめんさい。俺、今好きな人がいます」

気が付いたら、聖は頭を下げていた。脳裏には青い髪の少女の無邪気な笑顔が浮かんでいた。

「そう……」

「聖！」

高原の声をかき消した声と共に、聖が芝生の上に伏した。その背中には青い髪の少女が乗っかっている。そうなりながらも、手にもつたチヨコは一つも落としていない。

「聖、聖！会いたかった」

こういう登場の仕方をするのは、聖が知る限り彼の待ち人、ホーリー＝スノーだけだ。

「ホーリー、ちょっと、どいてくれないか。すぐ終わるから」

立ち上がり、ホーリーを横に待たせると、高原に向き直る。

「高原先輩……」

高原は、少しさびしそうに微笑んだ。

「可愛い娘ね……彼女が、比翼の鳥？」

「はい。少なくとも僕はそう思ってます。先ほどの絵（対となる片翼を持った男女が寄添う絵）の片翼のモデルは彼女です」

「そう……仕方ないね……」

高原が踵を返す。

「高原先輩」

「チヨコ、ちゃんと食べてね。貴方のために作ったのだから……」

「はい。ありがとうございました」

墓原の声は、少し震えていたが、聖にはこれ以上、かける言葉は見つからなかった。

「聖……」

ホーリーが、不安げに聖を呼ぶ・

「少し、風が出てきたから、僕の部屋に行こう」
聖はできるだけ、明るい声でホーリイに言った。

「チョコレートケーキだね、手作りの。ありがとう」

「聖も、もてるよね。手作り入れて全部で5個…」

ホーリイがプイツと横を向く。

そんなホーリイの仕草が可愛らしくて、聖はホーリイの肩に手をまわし抱き寄せた。

「きゃっ、ちよつと、聖」

「少し、このままで…ん！」

ちよつとした違和感。

「ホーリイ、ちよつと手を見せて」

「聖、やだ、放して」

聖はホーリイが逃げないように、左手で抱きしめたまま、部屋の中でも、したままの右手の手袋を外す。

中から絆創膏が巻かれた指が出てきた。左手も同じだ。

「あ、あの、私、料理とか苦手で…」

ホーリイは、赤くなって小さな声で呟く。

聖は、自分の腕の中で、小さくなっているホーリイの頭を撫でてそして、もう一度ギュツと抱きしめた。

「聖、苦しいよ。ねえ…さっきの…ひよくのとりつてなに？」

いつまでも、すねているのも嫌なので、ホーリイは話題を変えることにした。

「漢詩でね。玄宗皇帝と楊貴妃が、生まれ変わっても決して離れないと誓った詩……『天に在りては 願はくは比翼の鳥と作り 地に在りては 願はくは連理の枝と為らん』……嬉しいこと悲しいこと、楽しいこと苦しいこと、幸せなこと辛いこと、すべてをふたりで分かち合おうという詩」

ホーリイが、無言で抱きついてきた。

「本当に、私でいいの……」

聖は、唇でホーリーの口を塞ぐ。

「こんな事を、言うのはこの口か。駄目なんだよ。ホーリーとなら空だって飛べそうな気がするけど、他の人じゃ駄目なんだ」

「あの綺麗な人でも？」

「ああ、高原先輩でも駄目だ。もう僕の片翼は、腕の中にあるから聖は、もう一度ホーリーを抱きしめた。」

僕の腕の中にある、大切な翼。

ふたりであの蒼い空を飛ばう。

どこまでも、高く。

どこまでも、遠くへ。

いつまでも……比翼連理の誓い。

比翼連理の君と僕（後書き）

『聖夜に君と』の第2話。ちょうどこのとき（2004年2月）比翼連理、比翼の鳥・連理の枝をテーマに短編を書こうと思っていたときで、ちょうどバレンタインデーとかぶったので、聖夜に君とシリーズで書き上げました。

バレンタインデーと比翼連理の二つのテーマを使ったため、中途半端になってしまった感はありません。精進します。

このシリーズは、クリスマスから始まって、バレンタインデー、七夕、ハロウィン、そしてクリスマス。イベントのことに書いてました。ということ、第3話は七夕です。

星降る夜の君と僕

クーラーのないボロアパートで暑さに耐えかね、あることを思い立った僕の上に、狙い済ましたかのようにホーリイが降ってきた。

「……まあ、いつものことであるのだが……」

そして、事態を飲み込めていないホーリイを、バイクに乗せ連れ出した2時間後、僕らは、とある山の中にいた。

「ねえ、聖。一体どうしたの？こんなところに連れてきて？」

僕は、黙って夜空を指差した。街の明かりのせいで、僕の住むアパートからは到底拝むことのできない満天の星空が広がっている。ホーリイはきよんとしている。頭の上に？が浮いているかもしれない。

「ホーリイは、見慣れているかもね」

僕は、以前見せてもらった、ホーリイの住む村の写真を思い出した。星空がきれいで言葉を失ったのを覚えている。本物を見ることができたら、1時間は呆けているかもしれない。

「でも、今日は七夕なんだ」

「たなばた？」

聖夜に君と

天の川の東に織女と呼ばれる麗しい乙女がおりました。織女は機織を天職としており、毎日明けても暮れても機を織りつづけ、髪を繕う暇さえもなかった。そんな織女の姿を見た天帝は可哀そうに思い、天の川の西に住んでいた牽牛という男と結婚させることにしました。

しかし、幸せな結婚生活にすっかり酔ってしまった織女は、一日

中、牽牛の傍から離れず機織の仕事放棄してしまった。それを知った天帝は不心得千万と怒って、「即刻天の川の東に戻って機織の仕事をするがいい。愛に溺れて仕事をなおざりにするとは何事じゃ！今後牽牛とは年に一度だけ会うことを許すことにするから、そう心するがよい！」と織女を叱りつけました。

織女は天帝の言いつけに背くことも叶わず、天の川の東に戻り、牽牛に会える日を待ちわびながら、懸命に機を織り続けたのでした。

待ちに待った7月7日に雨が降って天の川の水かさが増すと、ふたりは東と西の川岸からただ恨めしげに水面を見つめ続けることしかできないのです。そんなふたりを見かねたカササギが、天の川を渡す橋となつて、織女を東から西の川岸へと渡してあげるのだそうです。

「そういう、伝説があるんだ。あれが天の川で、上の方で明るく輝いているのが織姫。天の川を挟んで、下の方で輝いているのが牽牛」
僕は、持ってきたシートの上に仰向けに寝て、星空を指差しながらホーリイに説明した。ホーリイも、僕と同じようにして星空を見上げている。

「この日に、短冊に願い事を書いて、笹に吊るすんだ。星に願いを…てね。ロマンティックだろ？」

ホーリイが、僕の右手を握った。

「ホーリイ？」

ホーリイの方を向くと、彼女の悲しそうな顔があった。そして、その瞳から流れ落ちる一筋の涙……その涙に一瞬、パニツクになりかかる。

「ホ、ホ、ホーリイ……」

「聖……残酷だよ……1年に1回しか会えないなんて……」

・織姫も牽牛もかわいそうだよ」

気が付いたら、僕はホーリイを引き寄せてギュッと抱きしめていた。どうしようもなく抱きしめたかった。愛しいかった。

「そうだな、残酷な話だな・・・」

ホーリイは自分を、織姫に投影したのかもしれない。今でさえ、1ヶ月に1回会えるかあえないかの僕たちだ。ホーリイがサンタクロースとしての移動手段がなかったら、1年に1回どこるか、数年に1回ぐらいしか会えないだろう・・・そもそも、ホーリイがサンタクロースでなければ、会うことすらなかったのかもしれないけど。

「聖・・・苦しいよ」

ホーリイがつぶやくように訴える。力が入りすぎてしまったようだ。少し力を緩めた。

目の前には、まだ涙に濡れるホーリイのアイスブルーの瞳・・・僕たちはどちらともなく口づけを交わした。

「聖、何をしているの？」

「ほら、短冊。笹じゃないけど、一応吊るしておこうと思ってね」

「なんて、書いてあるの？」

ホーリイが短冊を覗き込む。そして、暗がりでもわかるほど、頬が赤く染まった。

「聖……」

「僕の本心だよ」

「うん」

ホーリイは、赤くなっただまを頷いた。

短冊には、単純な、そして使い古された一文が記されている。

『君といつまでも』

星降る夜の君と僕（後書き）

星降る夜、七夕の夜のお話です。

第二話と内容は大きく代わっていないことに、今更ながらにして気がつきました。

話の背景が、バレンタインデーから七夕に代わっただけ……
i らんどで発表したときには、七夕の逸話ってそんな話だった
んですね。との声もいただきました。

ホーリイは、大きなバスケットを、聖に渡す。バスケットの中には美味しそうな香りを振りまくお菓子が入っていた。

「パンプキンパイにかぼちゃプリンか。ホーリイが作ったの？」

僕は、今年のバレンタイン（聖夜に君と2を参照）のことを思い出した。手を絆創膏だらけにしていたっけ。チラツとホーリイの手を見るが、絆創膏は巻かれていない、ホーリイの努力の成果だろう。

「うん、聖と食べようと思ったのよ」

「でも、仮装しているのはホーリイだから、お菓子をあげるのは、僕のほうじゃないかな」

と言っても、あげられるお菓子など持っていないのだけど。

「もう、細かい事はいいの。食べるの食べないの」

「食べます。食べさせてください。可愛い魔女さま」

「やだ。可愛いだなんて」

パシパシと、持っていた箸で聖の後頭部を叩いた。

「そつか、クリスマス終わるまでこれないんだ」

「聖、ごめんね」

「ホーリイは、子供達に夢を与えるサンタクロースだもんな」

ホーリイがサンタクロースのせいか、クリスマスは僕らにとつて特別な意味を持つ。10年前の出会い、そして去年の再会。クリスマスの夜の出来事だ。

「聖、ごめん」

「だから、そんなに謝らなくても良いって」

聖は、シユンとしているホーリイの肩を自分のほうに抱き寄せて耳元でこう囁いた。

「Trick or treat」

それを聞いたホーリイは、少しためらった後に、頬を朱に染めてこう返す。

「It is waiting to pleasure」

ホーリイの返事を聞いて、聖の顔も赤くなる。

聖は、最初の頃に比べると幾分か上手になったキスをホーリイとかわすと。部屋の明かりを落した。

早朝、ホーリイは聖を起こさないように身支度を整える。そして、自分の首から蒼い石のペンダントを外すと、聖の右手に握らせた。

10年前に、聖に渡したペンダント。ホーリイはこのペンダントが二人を再び合わせてくれたのだと信じている。

「2ヶ月ぐらい早いけど、メリークリスマス、聖」
呟いて、寝ている聖の頬にキスをした。

ハロウィンの夜の君と僕（後書き）

4話目。ハロウィンに魔法のいらんど載せたやつ。

反省点としては、メインテーマが変わっただけで流れは3羽目と変わらないことww（もう少しひねりを入れる俺）

ホーリーの英語のセリフは、翻訳にでもかけてみてください。書いたときはこれでいいのか？とビクビクものでしたが、指摘がなかったということは間違っただけだったということかな。（高校時代の英語の成績、10段階で3でした・・・orz）

雪、舞い降りる夜の君と僕

「ぶっ」

一日に一本しかないというバスから降り足元の雪を踏みしめると、青年は息を吐いた。一瞬間の前が真っ白になり、すぐに視界がクリアーになるが、世界は真っ白のままだった。

「……………雪がすごいところだとは聞いていたけど……………」

「彼の名は、柊^{ついで} 聖日本という国のごく平凡な大学生だ。」

その彼が飛行機で日本を飛び出し、列車とバスを乗り継いで雪山にいるのかと言えば、他人に話せる理由が30%、他人に話すのが少しだけ恥ずかしい個人的な理由が70%というところであるが、少し無謀ではなかっただろうか。

ふもとの食堂のおかみさんは、地元の人でも迷うことがあると聖を止めたが、決意が固いと知ると地図とコンパスを貸してくれた。

地図とコンパスで進むべき方向を確認した聖は、自分に気合を入れるため右手を振り上げ「よっしゃ」と雄叫をあげ、完全に雪に埋もれてしまっている山道に足を踏み出した。

1時間後

「……………行けども、行けども、雪ばかりだ……………」

同じような景色ばかりで、気分が滅入ってくるし、新雪を掻き分けて進むのは思ったより重労働だった。周りは雪なのに防寒服の中が汗ばむのがわかる。

コンパスと地図で確認すると、方角はあっている。

荷物を抱えなおして、聖は雪を掻き分け歩き出した。

2時間後

「いいかげん飽きてきたぞ……」

コンパスと地図を取り出す。再度確認……

「方角はいいけど……もう少し目印になるものでもないかな……」

首に下げた蒼い石のペンダントを握り、聖はある少女の顔を思い浮かべた。

3時間後

「……迷ってないよな……とりあえず、あの丘みたいになっている所に行ってみよう」

雪の中3時間も歩きずくめで、疲労もたまっているが、このまま雪の中で休む気にはならなかった。半分はホーリイに早く会いたいという理由だが……

「これで、てっぺんだ。何か見えないかな」

一人暮らしが、長いと独り言が多くなるなど、苦笑した。何か確認する時に、いちいち声に出してしまう。

あたりを見回そうとして、ズルツと足が滑った。聖は積もった雪と一緒に滑り落ちていくが一瞬で止まった。それほど高くは無かったようだ。運がいいことに、頭から雪に埋まる事も無かった。胸から下は雪に埋もれてしまったが……

「無謀だったかな、でもホーリイに迷惑かけたくないしなあ」

ホーリイには、訪ねることは伝えていない。いきなり行ってビックリさせようと思ったのも事実だが、今の彼女は尋常じゃないほど忙しいはずだ。彼女、ホーリイはサンタクロースなのだから。

聖夜に君と

どのぐらい雪に埋まって空を見ていただろう。いいかげん寒くなってきた。

「よし、行くぞ」

と、上半身を起こすと目の前に黒い筒があった。その先にはクマのような大男、筒が猟銃だというのに気がつくのに少し時間がかかった。

「あの、どなた様で・・・できたら銃口をどけて欲しいのですが」
男に駄目もとで言ってみる

「まずは、あんたが名乗りな。話はそれからだ」

「あんたが、ホーリイちゃんのいい人か。娘から聞いているよ。日本の人だってな」

「はい。大学に通っています」

聖は大男の後について村に向かっている。男の人、アラン＝ロツソさんの話によれば、村はもう300m程、西にあるそうだ。やはり無謀だったみたいで、あのまま歩いていたら今頃、遭難という事になっていただろう。

「しかし、なぜこの時期に？今忙しい時期だろ？うちの娘も手伝いに行っているよ」

「ええ、この時期だから、手伝える事もあるんじゃないかなと思いまして」

「ホーリイちゃんは、いい娘だ。泣かすようなことはしてくれないよ兄ちゃん」

「はい、そのつもりです」

アランさんは、振り返ってニカッと笑った。

「だったら、一人で山歩きなんてやめな。この辺は地元の人間でさえ迷うもあるんだからな」

「はい、肝に銘じておきます」

「ねえホーリイ。これ間に合うの？」

フェリアは、リストに印をつけて、包装の済んだプレゼントに小さなシールを貼る。このシールには識別番号が書かれている。

「ぎりぎり間に合いそう」

「それって、休憩の時間入っているの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

フェリアは、あきれたような表情をホーリイに向ける。

「あんたが倒れたら、誰が配りに行くのよ。誰か手伝ってもらえそうな人居ないの？」

「シャルちゃんは、自分の所で手一杯だろうし、他の人もお手伝いにでているはずなのよ」

「村の人間はダメね。あてにならないわ。そうだ、聖君と言ったわよね。彼は？」

聖の名前を聞いたホーリイの顔が赤くなる。

「だ、だめよ。聖には去年も無理に手伝って貰ったし・・・」

「いいのよ。男の子はこういう時に働いてくれないと、さあ、今すぐ電話よ。メールでもよし！」

この村は世界サンタクロース協会という謎の組織のおかげで、電気、ガス、水道は元より光ファイバーケーブルを使った、インターネットの利用も出来る。村自体にもそれなりの補助金も支給されている。

「・・・フェリア姉さん。楽しんでるでしょ」

「ふふ、お姉さんが品定めしてあげるわよ。さあ、電話電話」

とその時扉が二度ノックされて、大男が入ってきた。

「何を騒いでいるんだ。外まで聞こえていたぞ」

「あ、お父さん」

「アラン小父様」

「ホーリイちゃんに御客さんだ」

アランの後ろから出てきた聖を見たホーリイは指を差して、口をパクパクさせる。

「健康な19歳日本人男性だけど、雇う意志はあるかな？」

「聖!」

聖は、胸に飛び込んできたホーリーの小さな身体を抱きとめた。

「聖君、ご苦労様」

フェリアが差し出したマグカップには、ココアが入っていた。プレゼントの包装と、リストとのチェックがすべて終わったのは、つい先ほどのことだ。

「いえ、僕は2日でしたから・・・」

「でも、助かった。ホーリーに休む時間作ってあげられたもの」

聖は作業机に突っ伏して、寝息を立てているホーリーを見る。ココアが入るのを待てずに寝てしまったらしい。フェリアさんのいう事には1週間ほどこくに寝ていないそうだから無理も無い。

「ホーリーね。去年、クリスマス前にお爺さんを亡くしたのよ。でも、自分がお爺さんの分も配るんだって、結構無理して日本に行ったのよ」

聖は、何も言わずにフェリアの話に耳を傾けていた。

「帰ってきたら、やたら明るくてね。無理しているのと思ったら、昔1度だけあったことのある男の子と再会したっていうのよね。聖君ありがとうね」

「いえ、僕もホーリーと再会できて良かったです」

「ねえ、聖君にホーリーのこと頼んだら迷惑かな?」

「・・・明日は聖夜ですね」

フェリアは意味を計りかねたようだ。

「ほら、ホーリー。ちゃんとベッドに行かないと風邪を引くよ」

聖は、ホーリーを抱き上げる。

「小さい奇跡くらい起きてても不思議じゃありませんよ」

聖は、小さく笑った。

聖なる夜、クリスマスの夜、サンタは夜空を駆け巡る。

夜明けまで数時間、聖とホーリイはビルの屋上にいた。

「このビル、去年のビルだね。ホーリイからクリスマスプレゼント貰ったさ」

「この辺では一番高いビルだもの。はい、聖」

「うん」

ホーリイからフェリアさんの持たせてくれたココアの入ったカップを受け取る。

「さすがに寒くなってきたね、聖」

「ホーリイおいで、二人でいれば寒くないよ」

誰もいない屋上で、二人寄り添う。

「そうだ。ホーリイ、目を閉じてくれるかい」

「うん」

ホーリイは素直に目を閉じた。そのホーリイの首にネックレスをかけてやる。涙の形をした淡青色の宝石のついたペンダント。

「いいよ。メリークリスマス、ホーリイ」

ホーリイは、ペンダントを手に取る。

「これ、私に？」

「そうだよ。これからは、ホーリイだけのサンタクロスだ。その石ねアクアマリンとって、この石を身につけていると幸せになれるそうだよ」

「ありがとう、聖」

ホーリイがギュッと抱きついた。聖はホーリイの髪を撫でる。

「あ、雪」

気がつくくと、白いものがちらついている。

「ホワイトクリスマスだね」

「ホーリイの村だと、珍しくないだろうけど、ここで見ると感慨深いものがあるなあ」

「そんなこと無いよ。この街で始めて聖とあったときにも、二人で雪が降るのを朝まで見ていたじゃない。聖とこうしていると、その

頃の事思い出すよ」

「そうか……」

どれほどそうしていただろうか。二人で寄添っていても寒くなってきた。

聖は、今日ホーリイに伝えようと心に決めていたことを言う為に、口を開いた。

「ホーリイ、俺もサンタクロースになれるかな？」

「えっ？」

「サンタクロースになれるかな？」

「私に、プレゼントくれたよ」

「うん、ホーリイだけのサンタクロースもいいけどね。大学を出たら、ホーリイの住む村に行こうかと思っっているんだ。今回、村まできたのはそんな事を考えていた為なんだよ」

「聖には無理って言ったら」

「それでも行くかな」

「どうして？」

ホーリイのアイスブルーの瞳が、聖を見つめていた。

「それは……」

「それは？」

ホーリイをギュッと抱きしめた。

「ホーリイと、ずっとこうしていたいから」

数年後

「パパ、朝だよ。起きて」

「昨日、~~メ~~切だったんだ。寝かせてくれ」

アイスブルーの瞳をした小さな女の子が、もぞもぞと毛布の中にもぐり込む父親の黒い髪を握る。

「だめ、パパとママとティアで朝ごはん食べるの」

「ティアは言い出したら、聞かないからなあ」

父親は、あきらめて毛布の中から這い出すと、娘の黒い髪を撫で

て起き上がる。

「さあ、食卓へ向かいますか。お姫様」

「パパ、変だよ。大丈夫？」

娘の冷たい言葉に、呆然と拗ねながら娘の後をついていく。

「こら、ティア。パパは寝かせてあげてって言ったでしょ」

「いやー。みんな一緒がいいの」

「しょうがない娘ね」

「いいよ。食事は家族そろって食べた方が、おいしいからね」

そう言っつて青い髪にアイスブルーの瞳をした妻を抱き寄せ、結婚前より上達したキスをする。

「パパ、ずるい。ティアも」

「ははは」

娘にせがまれて、笑いながら頭を掻く。

「あなた、今回はどんなお話を書いたの？」

いたずらを思いついたような少年のような瞳で、意味ありげな笑みを妻に向ける。

「サンタクロースの女の子に、恋した青年のお話さ」

さらに数年後のクリスマスの夜

「うわあ、雪だ」

少年は歓声を上げ、窓の外を食い入るようにして見る。

「積もるといいなあ。健斗君達と雪合戦できるかなあ」

雪はゆっくりと、白い雪化粧を施していく。

「きゃー。どいてどいて」

ドン！少年の上に、悲鳴と共に誰かが降って来た。

「あいたたた」

「いてえー、ねえちよつとどいてよ。重いんだからさ」

「あ、ごめんね。今退くね」

声からすると女の子だ。顔を上げると自分と同じぐらいの歳のサ

ンタクロースのような赤い服と帽子を被った女の子が、少年に右手を差し出していた。少女は黒い髪で、すごくきれいなアイスブルーの瞳には、押さえ切れないほどの生気がみなぎっている。

「ね、君、大丈夫？ごめんね。ソリから落ちちゃったんだ」

少年は、少女の手を取り立ち上がる。

「君、誰？」

「私？私は、ティア、柊　ティア。見ての通りサンタクロース、ただ見習だけだね。ねえ君は？」

「あ、僕は・・・」

聖なる夜の新しい物語が始まる・・・

雪、舞い降りる夜の君と僕（後書き）

私がこのような話を書くのは、結構珍しく、いつもは拳銃をバンバン撃ちまくったり、剣や刀を振り回したり、魔法で敵をなぎ倒したりしている話を書いてます（笑）

ともあれ、聖とホーリィの物語はこれで幕引きとなります。ラストとしては陳腐な部類に入りますが、聖夜の物語はハッピーエンドが相応しいですよね？

今回で本編は終了ですが、もう一話お付き合いをお願いします。

番外編 : Sweet dayの君と僕

「パパ、起きて」

元気な声と共に、聖の腹を衝撃が襲った。「ぐえ〜」と声を出して飛び起きると娘のティアが自分目掛けてダイブしたのだと分かった。

「ティア。朝は穏やかに目覚めたいとパパは思うのだけど・・・」
「そんなことより早く起きて」

父親の言葉をそんなこと呼ばわりして、ティアは聖の腕を引つ張った。そんな娘に手を取られ寝室を出ると甘いチョコの香りが鼻をついた。

そうか、今日は2月14日バレンタインデーだったかと思いつく。小説家である聖は昨日の夜中まで締め切りに追われていたので気にとめなかったが、妻であるホーリイと娘のティアが二人してなにかしていたように思える。

ま、いいかと頭を書きながら聖は洗面所に向った。

「さあ食べて、パパ」

ティアが無邪気な笑顔を聖に向けていた。アイスブルーの瞳が聖を見つめている。そのティアの後ろに視線を向けると、困ったような笑みを浮かべているホーリイが立っていた。

そして、ティアと聖の間にあるもの、それは直径30cmほどあるチョコレートケーキだった。

聖は最初、訳がわからなかった。自分の目の前にあるケーキが何であるのか。その聖にティアはナイフとフォークを渡してこう言った「さあ食べて、パパ」と・・・助けを求めるようにホーリイの方に目を向けると、彼女は顔を左右に振った。その目が、ティアが一所懸命作ったのだから、食べてくださいと言っている。

切り分けられてもないホルのチョコレートケーキに視線を戻

すとケーキの向こう側からティアがニコニコと笑顔を向けている。聖は甘いものが苦手なわけではない、むしろ好きな方だ。だが、朝からケーキを食べられるほど好きかと聞かれたら、首を縦に振る自信は無い。いくらなんでもヘビーすぎる。蛇に睨まれたカエルのような聖に、ティアが笑顔でもう一度言った。「さあ食べてパパ」と・・・

「き、気持ち悪い」

娘の笑顔に負けて起きぬけにチョコレートケーキを完食した聖はソファアの上にひっくり返っていた。聖の頭に膝を貸しているホーリイがクスクスと笑う。

「なにも全部食べることもなかったじゃない？」

「あの期待に満ちた笑顔を前に残せないよ。しばらくチョコは見たくない」

「あら、私のチョコは食べてくれないの？」

「うっ・・・」

言葉に詰まる聖。

「あはは、嘘よ。さっきのケーキは私とティアの二人からよ。それより問題は・・・」

ホーリイは部屋の隅の段ボール箱を見る。中身は聖や聖の書いた小説の登場人物に宛てたバレンタインのチョコレートだ。出版社の担当者の話ではまだあるとか。

「ところで、ティアは？」

「今頃日本にいるはずよ」

「なに！一人でか？」

起き上がるうとする聖の額に手を当ててホーリイが制止する。

「大丈夫よ。ロロが一緒だし、去年のクリスマスに出会った男の子にチョコケーキを持って行くんだって」

ロロとは空飛ぶトナカイのことだ、なんと人語も30語ほどしゃべる。たしかにお目付け役としては彼以上の存在はないだろう。

「娘なんてそのうちに、誰かがさらって行っちゃうのだからあんまり親ばかしないの」

「ティアが彼氏を連れてきたら、頑固親父になるつもりだよ」

「どうかしら？ 聖はティアに甘いし、連れて来たら来たでパニツクになりそう」

そう言っつてホーリイは聖の顔を覗き込んだ。

たしかに頑固親父よりパニツクになっつて右往左往する父親の方が自分らしいかもしれないと聖も思うが、認めてしまうのも悔しいので黙っておく。

「ところで聖。そろそろキッチンを片付けてしまわないと、お昼ご飯も作れないけど」

「僕も手伝うから、もう少しだけ」

「そう？ だったら思い切り手伝ってもらおうかしら」
ホーリイは聖の頭をやさしく撫でた。

少年、鈴木聖夜、小学校5年生は義理チョコをいくつか抱えて上機嫌で帰宅すると、玄関の前で少女が座っているのを発見した。

少女も聖夜に気が付いたようで、聖夜に向い両手を振った。

黒髪にアイスブルーの瞳の特徴的な少女は去年のクリスマススイブの夜に聖夜の上に落ちてきた少女だった。両親や先生に話してみたが、夢でも見たのだからうと言われ、聖夜自身も夢か現実にあった事か分からなくなっていたが、どうやら現実であったらしい。確か少女の名前は柊ティアだ。

聖夜も少女に向っつて手を振り返した。

わんこチョコケーキ・・・

ティアが聖夜に持つてきてくれたチョコレートケーキはおいしく、ちゃんと8等分に切り分けられてもいたが、問題はひとつ食べると間髪いれずケーキの乗った皿が差し出される。

横のティアに目を向けると、嬉しそうに微笑むティアの顔があった。

その笑みを見ると、もう食べれないとティアに告げることが、とてつもなく悪いことに思える。

そのティアの横に積み重ねられている2つの箱が気にはなるが、今出ている分は全部食べようと、心に決め聖夜は7個目のケーキに手を付けた。

聖夜の気がかりだった横の箱は開けられることは無く。後で食べてと手渡された。正直、聖夜としてはしばらくチョコは見たくないというのが本音だったが。

「もう帰るの？」

空を駆けるソリに乗るティアに、聖夜が聞いた。

「あまり遅くなると、パパとママが心配するし。また遊びに来るね」「そうだちよつと待ってて」

慌てて自分の部屋に戻った聖夜はノートのきれっぱしにメルアドを書いてティアに渡した。

「これ僕のメルアドだから」

「うん。それじゃ、これは私のメルアド」

ティアは猫キャラクターのファンシーな手帳にメルアドを書いて聖夜に手渡す。

「それじゃ、またね」

ティアが小さく手を振ると、ものすごいスピードでソリが走り出す。

あまりに現実離れしていて、夢かと思える出来事だったが、聖夜の手の中にあるメモと机の上に置かれたチョコレートケーキが今起きたことは現実だと告げていた。なんだか、そのことがとても嬉しかった。

聖夜は、ティアにメールを出そうと自分のパソコンを起動させた。

END

聖夜に君と

番外編 : Sweet dayの君と僕(後書き)

本編終了後の2005年バレンタインデーに書いた話です。

ホーリイと聖も相変わらずラブラブです。

ティアと聖夜は、なんとなく本編のホーリイと聖をトレースさせてみました。最初はケーキと一緒に聖夜君の上に落とそうともおもったのですがね。(笑)さすがにケーキがぐちゃぐちゃになりそうだし、やめておきました。

それから、ティアの学校は?とか、時差とかは気にせず話だけを楽しんでね。その辺いいかげんです。

ケーキのホール喰い。甘党の自分としては、1度挑戦してみたいのですが、喰い切る自信ないです。

最後に、ここまで読んでくださった方。

最後までお付き合いしていただきまして、ありがとございました。またどこかでお会いできるといいですね。

番外編 : 魔法の夜の君と僕(前書き)

ギフト企画に出そうかと書き上げた作品ですが、なんだか趣旨と違っ気がして通常投稿しました。

聖夜に君と

番外編 : 魔法の夜の君と僕

「ちゃんと勉強しているの？ 夏から成績が下がっているじゃないの」

机に向かう聖夜せいやに母親のヒステリックな小言がのしかかる。そんなことは自分でもよくわかっている。そのことで焦りを感じているのも俺自身だ。

「あなたの将来のためなのよ。今、がんばらなくていつがんばるの？ いつもこれだ。俺はがんばっているよ。これ以上、どうやってがんばればいいんだ？ そんな無責任な励ましより、それを教えてくれよ。イライラが募る。」

「世の中、何を言っても結局は学歴なのよ」

「うるさい！」

握っていたシャープペンシルを机に叩きつけ、立ち上がり母親を睨む。

「もう出て行ってくれ！ 気が散る！」

そのまま母親を部屋から追い出す。

母親は、しばらく扉を叩いて何か言っていたが無視する。

部屋に静寂が戻ると、聖夜はベッドの上に倒れこんだ。卓上のカレンダーに目を向けるとクリスマスまで後4日、そして年が明ければセンター試験。色々と押さえ込んだ感情が爆発しそうだ。

「会いたいよ、ティア……」

聖夜は、アイスブルーの瞳に生気をみなぎらせた少女の顔を思い浮かべる。

彼女とは、友達以上恋人未満といった感じの関係だ。でも、彼女と会うと気分が落ち着いた。別に特別なことはしていない。ただ会って、声を聞いて、話を聞いてもらう、それだけ。だけど、それだけのことがとても大事なことだったんだと思う。

だけど、今はそれができない理由があった。実を言うと彼女はサ

ンタクロース見習いで、今頃はクリスマスの準備で忙しいはずだ。それに今年はサンタクロースの免許を取得するための試験があると言っていた。会うには、せめてクリスマスが終わるのを待つ必要がある。聖夜はそのまま目を閉じた。

「うわぁ、雪だ」

小学生の聖夜は歓声を上げ、窓の外を食い入るようじして見る。

「積もるといいなあ。健斗君達と雪合戦できるかなあ」

雪はゆつくりと、街に白い雪化粧を施していく。聖夜はそれを飽きることなく見つめていた。

「きゃー。どいて！ どいて！」

ドン！少年の上に、悲鳴と共に誰かが降って来た。

「あいたたた」

女の子の声が聞こえた。

「いてえー、ねえ、ちよつとどいてよ。重いんだからさ」

あまりに非現実的な出来事に、何故、室内にいて女の子が頭上から降ってくるんだという疑問は吹っ飛んでいた。

「あ、ごめんね。今どくね」

顔を上げると自分と同じ歳ぐらいのサンタクロースの赤い服と帽子を被った女の子が、少年に右手を差し出していた。ちなみに下はズボンでなくミニスカートにひざ下のブーツだ。寒くないのだろうか？

少女は黒い髪で、すごくきれいなアイスブルーの瞳には、押さえ切れないほどの生気がみなぎっている。

「ね、君、大丈夫？ ごめんね。ソリから落ちちゃったんだ」

聖夜は、少女の手を取り立ち上がり、その不思議な少女に聞いた。

「君、誰？」

「私？ 私はティア。終つひティア。見ての通りサンタクロース、ま

だ見習だけどね。ねえ君は？」

「あ、僕は聖夜。鈴木聖夜」

「聖夜君か。よろしくね」

ティアは笑顔と共に右手を差し出した。

ふと、目を覚ます。懐かしい夢を見たなとポーとする意識の隅で考えた。ティアと出会ったときの夢だなんて……

おかしい。目が覚めたはずなのに、ティアが聖夜の顔を覗き込んでいた。幼いころのティアでなく、今のティアだ。どうやら膝枕されてるらしい。まだ夢を見ているのかと考えていると。ティアが微笑んだ。

「おはよう、聖夜」

その声を聞いて、急速に意識が覚醒する。

「ティア！ ど、どうして？」

起き上がるうとする聖夜の目を、白く細いティアの手が塞ぎ。周りが見えなくなる。

「聖夜はそのままね。ちょっと疲れているみたいだよ」

誠也は起き上がるのをやめた、ティアの手のぬくもりが心地いい。「うん。疲れていた。けど、こうしていると疲れが取れるようだ。

でもどうして日本に？」

「試験の下見に来たのよ。聖夜の顔も見たかったから寄ったのだけだ。起こしちゃったね」

「いいよ。勉強しなければいけないしね」

ティアの手がゆっくりとどけられた。ティアはもう一度、聖夜の顔を覗き込む。

「聖夜、だいぶ疲れてる」

「うん。でも足掻けるだけ足掻かないと、落ちてから後悔する」

そう言って笑ったつもりだったが、実際には頬が少し引きつった

ただだ。笑うこともできない状態じゃ限界も近いな。と心の中で思う。センター試験が終わるまで持つてくれればいいのだけだ。

「ねえ聖夜、ちよっと付き合ってもらえる？」

ティアともう少し一緒に居たかった聖夜は頷いた。

聖夜がティアにつれてこられた場所は、この辺では一番高いビルの屋上の上だった。ティアが不思議な道具で作り出した空間のおかげで、風や寒さは感じない。

街が一望でき、光の海のような夜景がきれいだった。

二人で腰掛けて夜景を眺めているうちに、聖夜は色々たまった胸のうちのティアに話していた。ティアは時折あいづち打つ程度で、聖夜の話は黙って聞いている。

「俺はどうしたらいいんだろう。もう限界だよ」

弱気になった聖夜の瞳に光るものが盛り上がるが、聖夜は必死にこらえる。しばらくの沈黙を置いて、隣に座っていたティアが立ち上がった。

「ティア？」

「聖夜はそのままね」

ティアは聖夜の背後に回ると、聖夜の背筋を伸ばさせる。そしてそのまま背後から誠也の首に腕を回した。ティアの顔が聖夜の顔のすぐそばに並び、背中からはティアの体温が伝わってくる。

「ねえ聖夜。その気弱な顔はなあに？」

「えっ？」

聖夜はわけもわからず聞き返す。けれどティアはそのまま続ける。

「その目はなあに？」

「……」

「その涙はなあに？」

「……」

聖夜は、ティアの問いに答えられない。口から出たのはこの期に及んで気弱な言葉。

「でも、俺にはできないよ。がんばれない……」

聖夜の首に回したティアの腕に力がこもる。

「聖夜も他の人たちもがんばっている。でもちがう。聖夜はこれ以上がんばるらなくていいんだよ」

ティアの声は、なんだか子供に何かを言い聞かせているようだ。

「今の聖夜は、疲れて自分の限界を自分で作ってしまっただけだよ。がんばるんじゃない、自分で作った限界の蓋をはずすだけでいいんだよ」

「でも俺は……」

「私は知っているよ。聖夜は、自分で考えているほど弱い人じゃない。聖夜が自分でそう信じていなくても、私は知っているし、信じている」

「ティア……」

不思議だった。自分いくら言い聞かせてもダメだったのに、ティアの言うことだとできるような気がした。

不意に頬に柔らかくて、あたたかな感触が触れる。それがティアの唇の感触だと気が付くのに数秒かかった。

「女の子が使える男の子を元気にする魔法なんだって、お母さんが言ってた。ここまでサービスするつもりはなかったんだから」

はにかむように笑うティアを、聖夜は可愛いと思った。

「ありがとうティア。少し元気が出てきた。もう少しだけがんばるよ」

「聖夜。がんばったらダメだったら」

すねたようにティアが言った。

「そうだね。がんばらずにがんばるよ」

「なによそれ」

ティアが笑い、それにつられて聖夜からも笑い声が漏れた。

「聖夜。やっと笑ったね」

「ティアのおかげ」

聖夜は久しぶりに笑った気がした。作り笑いではなく心からの本当の笑顔。ティアが僕にくれた笑顔。

そして改めて気が付いた。自分がティアにとことんイカレテしまっていることに。

春にはこの想いを伝えたいと思いながら、聖夜は思いっきり笑ったのだった。

番外編 : 魔法の夜の君と僕(後書き)

最後までお付き合いありがとうございました。

今回のネタばらしです。

『ウルトラマンレオ』第4話「男と男の誓い」のモロボシダンのセリフより拝借したものがありません。

元のセリフは、「その顔は何だ！ その目は何だ！ その涙何だ！」ですが、以前からこのセリフ使ってみたかったんですよね。今回シチュエーション的にチャンスだということで組み込んでみました(笑)

見ていないのでよくわかりませんが、ウルトラメビウスでも使ったみたいですね、このセリフ。

聖夜に君とシリーズ(仲間内ではキミボクシリーズと呼んでましたw)は、書いていて楽しいのでお気に入り作品です。(たいていの作品は、お気に入りなんですけどねw)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2333c/>

聖夜に君と

2009年3月24日09時42分発行